

第1回・しあわせの村リニューアル検討有識者会議 議事録

令和元年9月9日(月)10時～

神戸市役所・1号館1121会議室

1 開会

2 あいさつ

(副市長あいさつ)

- ・しあわせの村が開村30周年を迎え、この30年間で大きく社会情勢は変化してきた。人口減少・少子高齢化が進む中で、神戸市は質の高い市民生活をどう作り上げていくかが課題と考えている。
- ・これからも市民が明るく楽しく生活できるようにするためには何が必要か、幅広く村の活用を検討していただくため、幅広い分野の委員の先生方にお集まりいただいた。
- ・あらゆる視点からの活用について、活発に議論いただくようお願いしたい。

3 メンバー紹介

- ・各委員よりあいさつ

(座長あいさつ)

- ・市長・副市長も前向きにしあわせの村の新たな活用・役割を考えている。この会議では是非様々に提案できればと思う。

4 議題

(1) しあわせの村の概要について

- ・資料3に沿って事務局説明

(委員) 福祉領域の成果を数値で測ることは難しい。障害者当事者や利用者の評価が重要ではないか。

(事務局) 指定管理者制度導入時に、管理運営の状況を利用者から評価を受けている。年1回アンケートを実施し、村全体や個々の施設利用者の満足度をはかっており、高い満足度を得ている。追加資料として調査結果を共有させていただく。

(委員) 満足度は感情的なものでありコントロールできない。サービスの質をはかるという観点が重要では。

(委員) 障害者雇用、福祉的雇用の満足度をはかることも重要では。

(委員) これまで、介護職の定着が悪いのでエルダーの設置、野外活動をつかった職場での仲間づくり

に取り組んできた。村の成果・質を把握していくことは重要。従事者にとっては利用者の感謝・満足がなによりのやりがい。従事者・利用者ともに満足できる環境が重要。

- (2) しあわせの村の課題と今後の方向性
 - (3) しあわせの村の新たな取り組み（案）について
- ・資料4・5に沿って事務局説明

(委員) 利用者アンケートをみると北区・須磨区の利用が中心になっているが、特にキャンプ場やスポーツ施設は人気がある。施設ごとの来村目的や利用状況が分かればよいと思う。プールの障害者の利用、時期的な利用分布等、詳細のアンケート結果が分かれば共有してほしい。

村が、神戸市全体がインクルーシブになるための拠点になることが必要。中でも働き方をつくる視点が重要。自身も神戸に貢献しようと思うと、神戸市に住んで関わっていききたい、地域に還元していききたいという想いがある。周辺の居住施設が人口減により空いてきている。こうした施設を活用し、先端研を含め、NPOや企業などが集まって、地域での活動の拠点となるサテライトオフィス群を整備するという考え方もあるのではないか。そこでは外から来る人も宿泊的に、一時居住できるという考え方で宿泊施設や近隣団地を活用することも一案。そのためにも移動支援の強化は必須。

市民から見える形で先進的な福祉テクノロジーの展示会などを村で開催し、全国発信されるということも考えられる。

(委員) 皆さんの意見に大賛成である。オートキャンプは大人気で予約がとれない。既によいこの村を、よりよくしていくためのアイデア出しができれば。

パラスポーツについて、WOWOWが東京で開催されたノーバリアゲーム（松岡修造司会）が素晴らしく、村で開催してほしいとアプローチしている。

「しあわせ」は十人十色であるはずだが、「固定化されたしあわせ」を提供する場になっていないか、自問することが必要。社会環境の変化に対応するためには、あたらしいテクノロジーを導入することが欠かせない。しあわせの村がそのための先進地・実験施設だ、というコンセプトを持ち続けることが重要。具体的には、自動運転などの移動支援、特にパーソナルな移動支援が重要であり、村は電動車椅子、自動運転の実証にふさわしい環境が整ってる。最先端の福祉実験場になってほしい。

(委員) 開村当時から福祉観は変わってきている。当時は「ノーマライゼーション」が主流。社会全体がまだまだバリアフリー化ができていなかった時代で、高齢者・障害者は不幸せであることが前提の「しあわせの村」というネーミングに当時から違和感があった。居住者がいないのに「村」にも違和感があった。今は「ソーシャルインクルージョン」が主流であり、社会そのものを変えていくという価値観。価値観の変化を踏まえた新たなものを村から発信していく必要。住まいについてもひとつ。ひよどり台団地の空き家の再開発も含め、村を拡大していく戦略もあると考える。

(委員) 認知症医療の立場から。認知症大綱にうたわれた通り、「予防と共生」が重要。市条例にも盛り

込まれている。村にはハードの受け皿が整っている。若年性認知症、早期の患者で、元の職場では難しいが、就労能力もあり、生活のために収入が必要な方への支援ができないか。こういった方への、本人の認知能力が低下しつつある中での支援が必要である。元の職場では心理的疎外感、敗北感により症状が悪化する懸念がある。一般企業ではケアが困難で解雇される事例もある。本人が納得しながら働けるための様々な準備の場となれば、ボランティア等も含めてゆるく活躍できる場を検討できないか。全国で注目されている「注文を間違ってもいいレストラン」などもできるのでは。予防の観点から、「コグニサイズ」よりもトータルに生活を支援する「コグニケア」の考え方が重要。日常的な健康状態の把握から、プログラムの効果の測定など、予防のためのエビデンス・ヒント作りも積極的に取り組むべき。

(委員) 村の運営者として開村当初から8年関わった。5km 圏内（ひよどり台・星和台）から強固な支持を受けている施設。もともと、神戸・大阪は普通校に通う障害児が日本の中では極めて多い地域である。そこで、パラスポーツの先進地としての役割も果たしていくという発信は可能ではないか。2020 オリパラ後を見据え、持続可能なパラスポーツの支援ということで、スポーツ合宿への対応は行政も堂々に行えばよい。教育の面でも、次の学習指導要領から初めてパラスポーツについてのカリキュラムが入る。そのように教育でも重要となる項目のため、しあわせの村をプラットフォームとして開放していく、という考え方が必要では。

(委員) 障害者であれ、認知症であれ、市民社会が個性を持った多文化を許容する社会であり、それが当たりまえの神戸市になってほしい。それ以外にも同和、外国人などの歴史があるが、多文化であることが強みであり、そのための環境づくりをしあわせの村から作り出せないか。

(委員) 多文化共生を先取りした地域であってほしい。障害、高齢者に加え、児童、青少年を考えたい。青少年が役割をもって関わってくれる仕組みができないか。地域の学校をターゲットにプレイパークのリーダー育成の仕掛けがうまく機能している。地域に根差していくために、循環と共生の仕組みができないか。通学合宿の取り組み、大学生ボランティアも関わって取り組んでいる。地域の人との関わりが、「ここに住んでよかった」と思えるために重要。エリアを広げた仕掛けが重要。

(委員) しあわせの村はこれまで「非日常」のための施設であったが、それを「日常」へ転換していく、ということが課題になっているように感じる。開村時は、非日常を提供することで日常を支えるという、「非日常」に偏ったコンセプトだった。今後は、働く場の提供など、日常に重点を。地域機能の回復のため、村がどう貢献していくかが重要。村に来てもらうのではなく、どう発信していくべきか。将来的には先端技術でバーチャル体験も可能ではないか。ひよどり台をモデルケースに、地域と関わっていくとよい。村での日常を発信していくべき。

(委員) 村でドローン教室をやってほしい。人命救助や運搬手段、様々な場で有効、大きな可能性がある技術であるが、正しく技術を学ぶ場が少ない。

さらにあたらしいテクノロジーをどう活用するか、教育の場としてもしあわせの村の役割は重要である。子どもが原っぱで這い回って遊べる昔ながらの遊ぶ環境もあり、新しい遊びもあり、両方があるとよい。住環境をどう組み合わせるかについて、委員の意見を聞いていて重要だと感じた。

(事務局) 開村からの福祉観の変遷をへて、「村」から「地域」へがキーワードであると認識している。この村を、社会全体を変えていく拠点にしていきたい。子どもの切り口等も含めさらにアイデア出してもらいたい。テーマごとの議論、横串の議論両面からお願いしたい。

(欠席委員からの意見)

- ・資料6に沿って事務局が内容を紹介

(事務局) 開村当初からの問題として、協会と他の施設運営者間の連携基盤がない。協会自体が福祉分野の動向に鈍感である。日本初の福祉公園であるが、公園の癒し効果は絶大。利用者、市民がそれを享受できているか問う必要がある。地域、地域の福祉団体との連携が十分でなかったことも反省している。イノベーション、実験が必要であり、そのための仕掛けづくりに取り組んでいきたい。

(委員) 村は市民の大きな財産。多様な層、市外からも来てもらいたい。利用者数は全く落ち込んでいない施設だが、利用者数を目標として掲げるべきなのかどうか、コンセプトと一緒に再考すべきかも。利用者数は極端に増加させず、ターゲットを丁寧に考えるべき。

(委員) 住まいの問題、居住人口をどうとらえるか。交流人口、関係人口ー観光以上、移住未満ーという考え方もあった方がよい。

(委員) 癒しの効果、非日常を提供することは否定するべきでなく、重要な観点である。そこにどう雇用、日常を組み合わせるかが重要。引きこもりや障害のある人、物理的に出てこれない人にどう働きかけるか。バーチャルも含めて検討したい。

(事務局) 全市的な施設というコンセプトで整備された村であるため、北区における村の位置づけは、これまで議論できていない。今後北区での位置づけは検討したい。

(委員) 人や社会と関係する力が弱い子どもが増えている。村でサポートできれば。子どもの貧困問題も含め、「育ち」の問題は福祉分野でも重要度が増している。「実際の体験」が「育ち」に与える影響は大きく、公園としての役割も引き続きしっかり果たしていくべき。村が自然との関わり、様々な人との社会的関わりのある場になるとよい。

(委員) 村が市・国をインクルーシブにする視点から、地域との関係性についての評価の視点があるとよい。しあわせの村の大きなポリシーに基づいて、個別の事業や取り組みが評価できるよう評価軸を整えることも大切。

地域でノウハウを持つ人を雇って、働いてもらう人を育成するなどもできるとよい。そのためには移動支援、アクセス改善も重要。村を拠点として高齢者等が活躍する UBER のようなサービスを認められないか。シルバーカレッジをインクルージョンカレッジとして講義をもって地域にノウハウ還元できないか。子どものインターンシップの受け入れができるとよい。

さらに、財政面の課題をどう解決するか。社会変革としての装置を村にもたせるために、村基金があるとよい。村のネーミングライツなどもできないか。

(委員) 非日常と日常の両面が重要。日常化の観点から、地域との関係づくり、市全域の当たり前の創出に貢献できる、ヒントになれるまちづくりを。認知症にアニマルセラピーも組み合わせられればよい。高齢者と子ども、など色々な交流が起こることを目指すべきだが、動物とのふれあいも、リアルな体験として項目に組み入れることに賛成。

(事務局) 馬事公苑でも既に実績があり、乗馬をつかったプログラムなど実施している。

(委員) 村全体が多様なプラットフォームになれば、いろいろな主体が相乗りできるようになるのだろうと感じた。インクルージョンやイノベーションは必ずジレンマが発生する。その調整機能があるとよい。例えば、移動支援。移動手段は就労者には切実な問題だが、村への路線は障害者手帳利用者が多くバスは走るほど赤字になる。そういった財源の問題も含めて考える必要がある。

また、ジャストアイデアだが、子ども対象の e スポーツを団地の空き室でできればよいのでは。

5 事務連絡

(事務局)

- ・第2回有識者会議：10月30日13時半～（場所未定）

(委員) 教育委員会も同席できないか検討してほしい。

6 閉会